九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジュゼップ・エルナンド(バルセロナ大学)著「西欧中世における反イスラーム論 : 極めて困難な相互理解 : ラモン・マルティの事例を中心に(中)」

阿部, 俊大
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

https://doi.org/10.15017/1500413

出版情報：言語文化論究. 34, pp.89-102, 2015-03-20. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

西欧中世における反イスラーム論：

極めて困難な相互理解――ラモン・マルティの事例を中心に（中）

ジュゼップ・エルナンド（バルセロナ大学）著

Josep Hernando, “La polèmica antiislàmica i la quasi impossibilitat d’ una entesa”, *Anuario de Estudios Medievales*, 38-2 (2008), pp. 763-791.

阿　部　俊　大　訳

４．ラモン・マルティの『ムハンマドの宗派について』における反イスラーム論の内容

本稿では、一般に『ムハンマドの宗派の形成・拡大とその四つの劫罰について』、或いはより短縮して『四つの劫罰』と呼ばれているラモン・マルティの反イスラーム論の著作を、『ムハンマドの宗派について』という名で呼ぶ。その内容を記したスペインに現存する唯一の中世の手稿文書[43]はそのタイトルを持ち――当該テーマについてのスペインの研究史上、一般にあまり知られていないのではあるが――イスラームに関する議論[44]において中世のキリスト教徒の著作家たちにしばしば引用されている。

ラモンは、マタイの福音書第７章第15節（※「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとってあなた方のところに来るが、その内側は貪欲な狼である」）に基づいて、導入部において本物の預言者の印（真実を語ること *verax*, 有徳であること *virtuosus*, 奇跡 *miracula*, 良きかつ聖なる法 *lex bona et sancta*）を説明した後に、ムハンマドの40歳までの人生とその偽りの召命について物語る。次いで、彼の宗派の発展と、ムハンマドが預言者としての資質を欠いていることの４つの印――当該著作がしばしばその名で知られたような、４つの劫罰を形成する印――、すなわち批判されるべき、また著者が考えるところの預言者ないし神の使いの資質と対照的だと判断される、ムハンマドの人格の４つの面が語られる。すなわち、1）嘘つきであった、2）不潔な罪びと *immundus et peccator* であった、3）一度も奇跡を起こさなかった、4）不潔であり、有害で邪悪な彼の教説 *lex quam tradidit fuit immunda, nociva et mala* ということである。この後は、著者が預言者にふさわしくないと見做すところの、ムハンマドの死 *mors Machometi fuit vilis, immunda et abhominabilis* が語られる。ムハンマドが偽りの預言者であるのなら、イスラーム教徒が真実の宗教であるキリスト教を受け入れるまでに、残る問題は一つしかない。『ムハンマドの宗派について』の結論と見做し得る部分においてラモン・マルティが議論を展開した、旧約・新約聖書の真実性と不可侵性である。中世において既に知られていたこのラモン・マルティの反イスラーム論のテクストの成功と、研究史上例外的な質の高さによって、我々はラモン・マルティのテクストに依拠した中世の著述家たちの反イスラーム論の内容を知ることができる[45]。

イスラーム教徒の著述家たちによる反キリスト教論の著作[46]においては、イスラーム教とキリスト教は４つの点で区別されている。すなわち、a）キリスト教は基本的な原理として破綻しているこ

と。b) 啓示された文書群は、聖書が偽造されたものであり、ムハンマドが聖書の預言者たちから予告されており、コーランはムハンマドが預言者であることの証拠である、と示していること。c) 神・三位一体・キリストに対する見解・贖罪といった教義。d) 礼拝、儀式、戒律、道徳[47]といった宗教的な慣行。の4つである。このため、ラモン・マルティの当該著作の2つの部分、すなわち、『ムハンマドの宗派について』に書かれた反イスラーム論の部分と、『使徒信経要綱』に書かれた、改宗の可能性があるイスラーム教徒たちに向けたキリスト教の教義の解説は、これらすべての点を論破する統合された作品を形成しているのである。反イスラームの部分では、ムハンマドが本当の預言者であり、また聖書は偽りであるとする見解に反論が行われる。『使徒信経要綱』においては、聖書の真実性と一体性の証明の後に、キリスト教の教義面、つまり宗教的慣習に関わる疑問が、論駁すべき直接の競争相手であるイスラームを念頭に置きつつ、説明される。

我々は、イスラームに対する議論が始まる瞬間に、キリスト教神学は防衛体制とキリスト教信仰の開示の姿勢を取ることを忘れてはならない。このシステムは、宗教的議論において、普遍的に作用するものである。このとき、キリスト教を中傷者たちから擁護するために練り上げられた、イエス・キリストの使命に対する信仰を正当化するための論議は、完全なものと見做される。この考えに従えば、キリスト教のモデルに合致しない全ての宗教は、伝統的な神学においてそうである（或いはそう示されている）ように、断固としたやり方で拒絶され、罰せられなければならない。この態度は論争家たちの心性に余りに深く根付いているので、例えばイスラームに対する批判においては、両者を分かつ差異を示すことで、キリスト教の教義と不信仰者の確信の間の並行性を確立するのに、またそのようにして新しい預言者の宗教を否定するのに、十分であるとしばしば考えられてきた[48]。

しかし、この議論は、キリスト教徒たちを納得させるのには十分だろうが、イスラーム教徒たちに、彼らの信仰が過っていると納得させることは到底出来ないだろう。それゆえ、他の論拠も提示される。非難や侮辱を積み上げることではなく、理性的に自身の信仰を確認し、また、相手の信仰を、論拠に基づいて弱めることで信仰をよく守ることができるのである。このため、キリスト教徒の論争家たちは、イスラームとの論争において、論理によって自説を強化し、支えることを意図した。彼らはこのような論理を、彼らの伝統的な護教論の中に見出した。すなわち、キリスト教信仰の正しさを支持する議論は、両刃のナイフのように、イスラームの誤りを証明するためにも用いられたのである。

このような考え方の論拠は、極めてシンプルである。もしキリスト教が真の宗教、すなわち神から人間に与えられた宗教であるのなら、神はキリスト教信仰に対抗する他の宗教の真実性を保証するわけがないと考えねばならない。信頼性についてのこの理論は、本物であると装おうとする全ての信仰において見出されると考えなければならないだろう。さらに言えば、神の召命を受けたと称する全ての預言者は、真の宗教の真実性、すなわちキリスト教信仰の真実性を保証する、同じ理論を通じて自身の証明をしなければならない[49]〔※以下はラモン・マルティの著作の内容である。〕

つまり、イスラームはキリスト教との関係において、宗教的概念、教義、道徳、礼拝について、非常に大きな相違を有しており（もしくはそれらを非難しており）、イスラームの預言者であるムハンマドはキリストに反していて、信頼性の基準をあまりに逸脱しているので、その召命やイスラームが真実のものであると信じることは不可能である。さらに、ムハンマドに授けられた預言者の書であるコーラン[50]は、神がモーゼや他の預言者たち、福音書作者たちや使徒たちに着想を与えた真実の聖書とかくも食い違っており、真実の書であるとは主張できない。その上、コーランは、本物の啓示を回復し、確認するために啓示されたと断言している。このような主張は受け入れられない

し、イスラームの信憑性について更なる議論を惹起するものである。

ラモン・マルティの『ムハンマドの宗派について』における反イスラーム論の内容は、３つの命題にまとめることが出来る。1）ムハンマドは偽りの預言者であること。2）コーランとキリスト教の聖書の対応関係。3）ムハンマドの教説の検討。それらを述べる前に、ラモン・マルティがもっぱら論拠としている資料群は、イスラーム法源とも呼びうるものに記述されているものであることを確認しておこう。すなわち、預言者を通じて人々にもたらされた神の言葉であるコーラン。短縮してスンナ（慣行）と呼ばれ、編者の名前で知られているアル・ブハーリーまたはムスリム・イブン・ハッジャージュの集成（『真正集』）に基づいて引用される、信徒が従うべき預言者による生活や教育の上での伝統、スンナ・アン＝ナビー *sunnat al-Nabi*（預言者の慣行）[51]。預言者が辿った道程を示す、ムハンマドの伝記スィーラ *Sira*[52] である。

ムハンマドの召命の信頼性を否定する論拠は下記のとおりである。本当の預言者は、例えばモーゼのように、何人かの信頼できる証人たちによって、信頼に足るやり方で、「この預言者たらんとしている者は、神の啓示、もしくは神による召命を受けた」と証言してもらう必要がある。これらの証人たちは、キリストの到来を預言した聖書における預言者たちのように、神の新しい使者の到来と召命を前もって預言することで、預言者となり得る。この預言者による証言は価値あるものである。神による霊感によって保証されている上、前もって語られていることで、特別な価値を得ているからである。

また、この同じロジックに従えば、ムハンマドは神の使者でも預言者でもないことになる。なぜなら彼には、中世のキリスト教的なメンタリティーによれば、真の預言者ならば持っているはずの諸条件が備わっていないからである。すなわち、出自の高貴さ、その召命が神に由来するものであると証明する証 —— 預言の能力や奇跡を行う力のような —— を為すこと、その人生が神聖なものであることである。

それと対照的に、ムハンマドは出自が卑しく、無知で、偶像崇拝者で、姦通者で、犯罪者で、預言者の称号の横領者で、奇跡によってではなく、剣によって自己を主張している。東方の論争者たちも西方の論争者たちも、預言者としての啓示を受ける前のムハンマドの伝記の部分を、論争のための意図を持って利用している。ラモン・マルティも、それを倫理上の理想であるイエスと比較する意図を持って、イブン・イスハークによるスィーラの記述に忠実に依拠している[53]。ムハンマドの出自と彼の最初の宗教は偶像崇拝であり、預言者としての召命を受けるまでのムハンマドの生涯の提示は、それ以上の説明が無くとも、彼とイエスとの相違を示すのに十分である。

預言者は、その召命が神に由来するということを証す証明をしなければならない。そのような証明は超自然的なものでなければならず、２種類に分けられる。１つは、将来を告げる、個人的な未来の預言である。キリスト教徒の論争家たちによれば、ムハンマドは過去の出来事、現在の出来事、未来の出来事に無知であり、それゆえに虚言者である[54]。

もう１つの超自然的な証明は、あらゆる種類の奇跡である。奇跡は、預言の才能と並び、預言者の神による召命が真実であることを示す証拠である[55]。ラモン・マルティは、自身の議論の中に提示された権威を、非常に断定的なコンテクストで用いている。コーランによれば、全ての預言者は、そのメッセージが真実であると保証するための印を携えている。モーセとイエスには、神は奇跡を行う力を与えた。ムハンマドには、奇跡を行う力ではなく、コーランの布教を人々に伝えることを彼の使命とするという事実だけが与えられた。それにも関わらず、ムハンマドの死後ほどなくして、ムハンマドをある種神格化するプロセスが開始された。イスラームの信者たちにとって、このような偉大な宗教の創設者であるムハンマドは —— とりわけモーセやイエスにおけるような ——、「預言

者たちの印」であるこの能力を欠かすわけにはいかなかった。こうして、この預言者による奇跡が書かれ、言及される文学が生まれた。この文学は、キリスト教徒たちの反論に答え、ムハンマドの優越を断言するのに有用であった。ムハンマドが行った奇跡で、西方で最も知られているものは2つある。一つは「時は近づき、月は裂けた」という韻文（コーラン第54章「月」1）に基づいた、裂けた月である。この韻文の誇張の要素は、ラモン・マルティにとって、馬鹿げていると退けるだけで十分であった[56]。ムハンマドのものとされ、イスラーム信者たちに広く受け入れられているもう一つの奇跡は、ミウラージュと呼ばれる、ムハンマドの昇天である。これは反イスラームの論争家たちによって手ひどく退けられ、特にラモン・マルティは『使徒信経要綱』において、「彼は天に昇ったとうぬぼれていたが、夜だったので、誰もそれを見ていない」と述べている[57]。

預言の質や奇跡を行う力は、言うなれば、預言者のペルソナ自体についての外的な指標である。他方、道徳的品格や聖性に関わる、それなりに重要な、神の使いとしての他の指標もある。参照すべきはイエスである。ムハンマドとイエスを比べれば、ムハンマドは蔑むべきものである。ラモン・マルティにとって ── 全ての反イスラームのキリスト教論争家たちにとってそうであるように ── ムハンマドは道徳的な生き方の見本からかけ離れている。それゆえ神は、彼を自分の預言者にはしなかったであろう。ラモン・マルティはそれを示すために、情報源としてコーランやアル・ブハーリーのハディース集を利用しつつ、ムハンマドの性的習慣についての言及を行っている[58]。彼の妻アイーシャの話に由来する、彼の預言者としての召命の起こりを説明する事実も考慮しなければならない[59]。だが ── 論争家たちによれば ── どのような信頼に足る証言があるというのか？答えはノーであり、ムハンマドの預言者としての召命は否定されねばならない。

彼の支持者たちを過ちへと誘導するために用いられた方法も、否定されるべきである。もしムハンマドの人格とその宗教が完全な否定に値するのなら、中世の論争家たちは、ムハンマドの死後わずかな年月の間の、イスラームの拡大の印象的な成功に触れずにおくことは出来なかった。イスラームの論争家たちによってムハンマドの召命が真実であることの証拠として持ち出されるこの成功は、キリスト教の論争家たちによれば、キリスト教の拡大とは深みが異なっている。彼らによれば、イスラームの拡大が成功した原因は、信徒たちの力、愚かさ、無知と、富への欲求である。キリスト教は拡大の手段を欠いていた。イスラームは剣と野蛮な力を用いた[60]。しかし、キリスト教の拡大には、手段と達成する目的の不均衡が存在していた。このことは、そのようにしてその宗教が真実であることを保証する、神の配慮を示している[61]。

論争家たちによれば、コーランは、先行する諸々の啓示と重なる一つの啓示を包摂することを意図している。そのようにしてコーランは、ユダヤの律法もしくはトーラーと、福音書とを承認する手段を提供しようとしているのだ。このため、コーランと聖書は、コーランが聖書や福音書の登場人物たちについて述べている全ての誤りを示すために比較される。さらに、コーランは、構成の無秩序と、聖典の種類についての無知を示している。これらは全て、コーランが啓示された書物でないことを示している。それゆえ、ムハンマドの預言者としての召命における預言の信憑性について、ラモン・マルティやその他の論争家たちは、無知、無教養、真実を歪めるもの、無分別、といった言葉を用いている。例えば、ムハンマドは、イエスの母のマリアとモーセの姉妹のマリアの事例のように、聖書の人物を混同している[62]。

ムハンマドは、モーセの法においてもまた福音書においても、自身の登場が予告されていると考えていた[63]。イエスの受難と死という、証明済みの事実を否定した[64]。ムハンマドは、神が、必然的に罪を犯すべく、人々を過ちの上においたと述べた[65]。ムハンマドは、地上の世界の複製である天国を考えており、それは聖書の真実の内容とは対応していない[66]。

宗教というものは、人間に対して高いモラルを提示しなければならない。そして新たな宗教は、モラルの向上における進歩を意味しなければならない。だが、ムハンマドによって提示された倫理は、キリスト教のモラルより上であるどころか、劣っている。さらに、性的欲求や残酷な欲求を支持し、人間を向上させるどころか、堕落させる。宗教と呼ばれるに相応しい宗教は、救世主の礼拝を通じ、人間を神のもとへ導くもの、彼に神の慈悲や行為をもたらし得るものでなければならない。ところが、イスラームにはそのようなものは何も見いだせず、無益な所作や儀式があるのみである。

ある宗教の信憑性の判断を可能にする本質的な基準は、その教説が２つの原則において正しいかどうかである。第一に、宗教は矛盾を含んではならない。そうでなければ、内的一貫性の絶対的な論理的規範が破綻することになる。イスラームは、矛盾だけではなく、既に語られたような、ムハンマドの無知を示す多くの誤りを語っている。それゆえ、イスラームの教説は、自然な知識の要求においても誤っていると結論せざるを得ない。第二の基準は、第一の当然の帰結として、宗教は超自然的な神についての知識に対する要求に適合していなければならない。神や偽りの教説について、誤っていてはならない。しかし、これらの誤りの存在を裁定するのは、健全な哲学に基づいていて、正統的なキリスト教信仰の絶対的真実によって解明された、神学的理性である。なぜなら神は矛盾した、或いは反対の真実を示すことは出来ないからである。ここに至って、反イスラーム論者たちは、改めて彼らの第一の裁定を確認する。イスラームは、偽りの書物に依拠し、偽りの預言者によって作られた、偽りの宗教である。この裁定は、しかしながら、実際には、全ての検証に先行して既に決定された出発点であった。

ラモン・マルティは、『ムハンマドの宗派について』において、東方キリスト教の論者たちが行っているように、異論はありながらも、自分たちの固有のものと比較しつつ受け入れることも可能でありうる、イスラームの法または教説の側面について、何も、或いはごくわずかしか、語っていない。それらの大部分は、結婚や性的倫理、食事の仕方についての逸話、戦利品の権利に関わることである。ムハンマドの信用を失墜させるためにそれらについて語るとき[67]、ラモン・マルティはコーランと、イスラームの法学規範であり、コーランに次いで神聖な書物であると見做されていて、ムハンマドとその教説について述べているアル・ブハーリーとムスリムのハディース集（『真正集』）のみを利用し、またキリスト教徒の原則を簡潔に提示している[68]。

イスラームにおける婚姻であるニカーフ *nikah* は、夫が嫁資であるマフル *mahr* の支払いと、女性に対して食料や夫婦生活で使用するものを与える義務などの幾つかの義務と引き換えに、継続的な権利を得るという契約である。イスラーム教徒は４人までの妻と、養うことが出来る限りの妾を持つことが出来る。つまり、一夫一妻のみを許して姦通や蓄妾を禁じているところの、神の法にも自然の法にも反する、一夫多妻と蓄妾を許しているのである[69]。このようにイスラームの婚姻というのは、夫と妻の間の、対等な契約ではなく、売買である。契約の対象となっているのは、夫にとっては、妻に対する権利であり、買い手は幾つかの条件が整えば、いつでも自分が望むとき、手に入れたものを放棄することが出来る。アラビア語ではこれを、絆を伴わない交際を意味する、タラク *talaq*（離婚）と呼ぶ。これは神の法にも、自然の法にも、人々が定める法にも反するものである。キリスト教徒の婚姻においては、男と女は対等であり、そのいずれかに許されたことは、他方にも許されなければならない[70]。

コーラン第２章「牝牛」233の章句にあるように、妻は子を得るための存在である。コーラン自体が、生理期間中の性行為を禁じ、性行為に制限を課している。この「法」のために、以下のような他の「法」の存在も理解できる。すなわち、一時的婚姻 *muta* と性交中断 *coitus interruptus* である。このように夫には、その妻との関係において、すべてが許されている。これは婚姻の制度における

無秩序を許していることを意味し、婚姻の主要な目的である生殖に反している[71]。一時的な婚姻、または快楽のための婚姻を、アラビア語でムトア muta（一時婚）と呼ぶ。これは婚姻に近い、一定期間の取り決めである。契約は定められた期間が過ぎると終わり、女性には対価を支払う。コーランは明白に一時婚について語っており、それを、ムハンマドや彼の戦士たちが行うことも可能な、許された慣習と見做している。婚姻の性質というものを念頭に置けば、このような法は、神の掟や公共善に反するものとして退けたはずである[72]。アズル azl と呼ばれる、ムハンマドがその信徒たちに、性的関係を持ちたいと考えている女性が妊娠していると明らかな場合に欲望を充足する手段として許した、性交中断も否定されるべきである。この慣習は、イスラーム地域全体で今日なお維持されているのだが、神の法に反し、婚姻の主要な目的である生殖と矛盾していると考えられる[73]。

ムハンマドの食事の際の食卓における、また信徒たちに語った慣習を揶揄した後[74]、ラモン・マルティは、ムハンマドが「神が我々に許した」と言い、コーランにおいて「汝らによく心得ておいてもらいたいのはどんな戦利品を得ても、その５分の１だけは、アッラーのもの、そして使徒（ムハンマド）のもの、それから近親者、孤児、貧民、旅人のものであるということ」（コーラン第８章「戦利品」41）として正当化されている、戦利品についての法を否定している[75]。

ムハンマドは偽証者であり、イエスとは全く異なっている。さらに、もし誰かが誓いをなしてその誓いを破った場合は、ムハンマドが行ったように、いつでも合法的にその後に償いをすることが出来るのであり、これは偽証を許すことを意味している。それゆえ、神の法に反している[76]。イエスの道徳的な完全さは、思考と行為に及んでいる。その一方、ムハンマドが提示したのは以下の通りである。「思考の罪は、それが行いに現れたときのみ罪である」。キリスト教の倫理面での優越は明らかである[77]。キリスト教のモラルは、男女の同性愛を罰する点においても、ムハンマドの意見より優れている。彼はこの罪を重大なものとは考えず、それによって、男女がそのような罪を犯す道を開いたのである[78]。

このため、ラモン・マルティが言っているように、結論付けねばならない。「ムハンマドによって、彼の追随者たちのために定められたこれらの法を見れば、彼の法が極めて不潔で最悪なのは明らかであり、従って神の法ではなく、ムハンマドは神の預言者でも使いでもない」。

注

43　ソリアのエル・ブルゴ・デ・オスマ司教座聖堂参事会図書館の手稿文書46番である。このテクストをスペイン語訳を付けて出版したものが、J. Hernando, “Ramon Martí. *De Secta Machometi o De origine, progressu et fine Machometi et quadruplici reprobatione prophetiae eius.* Introducción, transcripción, traducción y notas por Josep Hernando”, *Acta Historica et Archaeologica Mediaevalia*, 4 (1983), pp. 9-63. ラモン・マルティの当該著作に言及する際は、上記のテクストのページに対応する数字に従いつつ、『ムハンマドの宗派について』を用いる。

44　「中世の学問における恐ろしいほどの業績」というのが、N. Daniel, *The Arabs and medieval Europa,* London, Ed. Longman, 1975, p. 239. における評価である。このラモン・マルティの反イスラーム論の質の高さと、その筆者の持つ情報のレベルを示す指標の一つが、ごく短い論考におけるその典拠の引用回数である。旧約・新約聖書は10回引用されている。コーランは37回、アル・ブハーリーの著作は24回、ムスリム・イブン・ハッジャージュのものが８回、イブン・ヒシャームが５回、アヴェロエスが１回、アル・キンディが２回、アウグスティヌスが１回、それぞれ引用されている。専門家たちによって確認されたこれらの引用は、ラモン・マルティがアラビ

ア語に精通していたことを示している。

45 我々（※原著者）の版によるラモン・マルティの反イスラーム論の中身については、J. Hernando, “Ramon Martí (s. XIII). *De Secta Machometi*” の註43を参照（先述したように、これ以降は『ムハンマドの宗派について』の名で、この版のページに従って引用する）。また、J. Hernando, “Ad ostendendum quod Machometus non fuit Dei propheta”. La polèmica antiislàmica a la baixa edat mitjana”, *Creences i ètnies en una societat plural*, Reunió Científica, III Curs d’ Estiu Comtat d’ Urgell (Balaguer, 13, 14 i 15 de juliol de 1998), Lleida: Pagès editors, 2002, pp. 133-152. も参照されたい。

46 キリスト教は、イスラームからどのように見られていたのだろうか？簡単にまとめると、コーランはイスラームにおける最初の反キリスト教の著作だと言える。コーランの解釈学（タフスィール学）*tafsires* やイスラーム法学 *fiqh*、イスラームの教義 *kalam* などにおける、イスラーム論の共通したテーマや議論はコーランに由来するからである。この反キリスト教のイスラーム文学の好例が、アンセルム・トゥルメダ Anselm Turmeda（マヨルカ 1352/55 —— チュニス 1424/30）である。彼はイスラームに改宗した後、彼自身の自伝と、チュニスの支配者の歴史、キリスト教への反駁を含む、トゥフファ *Tuhfa*「贈り物」の名で知られる著作を著した。この著作には、イスラームの反キリスト教論の基本的・古典的な考え方を見て取ることが出来る。「イスラームは全ての宗教の中で最高のものである」「キリスト教徒の記述は偽りである」「キリスト教は教義と信仰において偽りである」「全てのキリスト教徒は嘘つきで愚かである」。「イスラームは全ての宗教の中で最高のものである」について。それは完全な宗教で、欠点や批判の対象となる要素を全く見いだせない。それは〔唯一の〕神の宗教であり、正しい道である。ウンマ〔イスラーム教信徒の共同体〕は完全かつ理想的な共同体であり、神に守られた共同体であって、それゆえに無謬である。「キリスト教徒の記述は誤りである」について。キリスト教はイスラームのように、啓示された宗教である。神はその書物、彼の預言者であり使徒であるイエスについての唯一の福音書（キリスト教の聖典である四つの福音書ではなく）を下した。福音書は唯一のものであり、不一致や多様性があってはならない。疑いなく、この神に啓示された福音書は福音書作者たちと初期の弟子たちによって、そしてまた初期の共同体の設立者たちによって、イエスに重大な誤りを帰し、かつ福音書相互間の相違を生じさせつつ、歪曲されたのである。そのために、キリスト教徒たちは盲いた集団で在り続けている。「キリスト教は教義と信仰において偽りである」について。三位一体の教義は馬鹿げている。なぜなら神は唯一のものだから。全てのキリスト教徒にとって根本的なものであるキリストの受肉は、イスラームにおいては馬鹿げている。イエスは創造主ではあり得ない。つまり、神が、弱いが故に神に祈り、神に訴え、自らを神の使いとしていることになる。神でありかつ人であるということはあり得ない。２つの神が存在することになり、馬鹿げている。父と同質の、三位一体の第二のペルソナなどではない。彼は神と同じ知識を持っておらず、人生において悩み、神であるが故にではなく、神の恩寵の故に奇跡を為している。神には空間も時間も無く、生理的欲求を伴う身体も無い。疑いなく、彼はその預言者としての、また全ての預言者と同じく神の使いとしての自らの性質を受け入れていた。彼は敬虔で、神に感謝し、祈りにおいて誤ることなく、悪魔の誘惑に対峙しても罪を犯すことなく、誤りがない。決して過ちを犯すことがないが、天使たちと同じ知識を持っているわけではなく、神が彼に示した言葉を知っているのみである。聖霊は、イスラームにとって奇妙な存在である。キリスト教の意味合いにおける原罪を認めていないため、救済も認めていない。トゥフファによれば、キリスト教徒たちは来世も信じていない。イスラームの天国の非常に物質的な描写を拒んでいるし、また身体の復活を信じないことを非難

しているからである。秘蹟であり、キリスト教徒になるために不可欠であるとキリスト教徒が信じているところの洗礼に対しては、同書は洗礼と塗油の儀式を攻撃しつつ、割礼を擁護する。ミサと（または）聖体拝領に関しては、論理的に拒絶している。悔悛／告解の秘蹟も ── トゥフファではキリスト教の根本的な教義の一つとされているが ── また拒絶されている。聖職者全般、特にキリスト教徒たちの指導者である司祭たちは、より悪い存在とされる。なぜなら彼らは民衆を騙しているからである。彼らに関しては、貞潔と独身制を否定している。彼らの秘蹟における行為も否定している。キリスト教徒の倫理に関しては、一夫一婦制を否定している。キリスト教徒の祝祭や祈祷も評価しない。要するに、キリスト教徒は不信心者であるとされる。M. Epalza, *La tufha, autobiografía y polèmica contra el Cristianismo de Abdallah al-Taryuman*（*fray Anselmo Turmeda*）, Roma: Academia Nazionale dei Lincei, 1971. を参照。 また、M. Fierro, *"La Polèmica islàmica anticristiana", Creences i ètnies en una societat plural*, cit., pp. 105-132. を参照。

47 関連する文献として、E. Fricht, *Islam und Christentum in Mittelalter Breitäge zur Geschichte des muslimchem Polemik gegen des Christentum in arabischen Sprache*, Breslau, 1930, pp. 39-150; G. C. Anawati, *Polemique*, cit., pp. 379-380.

48 この並行性は、教説の領域においてのみでなく、モラルや終末論の領域にも確立されているようである。例えば、『アル・キンディの弁明』において、イスラームは救済や礼拝のコンセプトにおいてキリスト教を特徴づけている、慈悲、寺院、霊魂や身体の癒し、讃美歌や祈りといったものを持っていないと議論されていることを見ることが出来る。

49 このため、ラモン・マルティは彼の論考をこのように始めているのであろう。「ムハンマドが、イスラーム教徒たちが主張するような預言者でも神の使いでもないと証明するために…神がマタイの福音書の 7 章において、偽の預言者たちや彼の信者たちがそれから身を守るべき敵たちについて、おっしゃっていることを念頭に置かねばならない「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮をまとってあなた方のところに来るが、その内側は貪欲な狼である。」」*De Secta Machometi*, p. 15.

50 イスラーム教徒の聖典であり、イスラーム法の第一の法源であるというコーランの性格を、彼が踏まえていることが理解される。それゆえ、預言者によって人々にもたらされた神の言葉であるため、それはイスラームの根本的な基盤なのである。従って、イスラームの信仰のシステムにおけるコーランの優越は絶対的なものである。キリスト教信仰の内容の中心はイエス・キリストのペルソナにあるのに対し、イスラームでは書物にある。

51 スンナは、預言者が発した言葉と彼に帰される言行を集めたテクスト集成の中に見出すことが出来るものであり、すなわち、伝統やハディース、預言者の言葉の総体である。コーランに由来するイスラーム法の内容をより詳細にするために、法学者や神学者は、スンナに依拠する。コーランとスンナは、イスラーム信者の信仰、法、敬神や生活習慣の 2 つの主要な典拠である。ラモン・マルティは、アル・ブハーリー（875年没）とムスリム・イブン・ハッジャージュ（875年没）によって集成された、ほぼコーランと同様の権威を持つハディース集（『真正集』）を使用している。

52 最も古く、かつ有名なものの一つがイブン・イスハーク（767年没）によるものである。現在までイブン・ヒシャーム（833年没）の版が伝来しており、ラモン・マルティもそれを利用している。

53 スィーラと呼ばれる伝記によれば、ムハンマドはアブラハムの息子イシュマエルの子孫であり、彼の父はアブド・アル・ムウタリブの息子でアブド・アラーという名であり、母はワード・ベン・アブド・マナフの娘で、アミナという名であった。彼の父は、彼が生まれるより前に死ん

だ。ムハンマドが6歳の時、母が死んだ。コーランやその他の書物に見ることの出来る複数の話において、彼の両親は地獄に落ちたと読むことが出来る…またスィーラによれば、彼は25歳の時にハディージャと呼ばれる女性と結婚したそうである…彼女はムハンマドの最初の妻であり、彼女が死ぬまで他の女性を娶らなかった。彼女から、偶像崇拝のまま死んだ3人の息子と、後にイスラーム教徒となる3人の娘が生まれた。また、アル・ブハーリーと呼ばれる書においては、「誓約／保証」の章において、ムハンマドが40歳の時に預言者として召命され、メッカに13年滞在し、53歳で死んだとされる。40歳まで偶像崇拝という過ちを犯していたことがコーランの第93章「朝」によって確認される。そこでは神がムハンマドの逸脱、すなわち神の法を無視していることに気付き、彼を導いたと記される。*De Secta Machometi*, pp. 18-21.

54 ムハンマドの偽りの預言の能力については、ラモン・マルティは以下のことだけを述べている。「このようにムスリムと呼ばれる書において、審判の日については、「100年が経つ前に、地上には一つの生きた魂も、つまり一つの生き物も居なくなるだろう」と言っている。同じ本においてアイーシャが言うところでは、何人かのアラブ人がムハンマドに審判について尋ねた。ムハンマドは最も若い者を見て言った。「彼が――生きていればだが――審判の日が来る前に老いていることは無いだろう」このように、ムハンマドが、100年以内に審判の日が来ると預言し、保証したのは確かである。そしてそれは明らかに誤りである。彼がそう言ってから、もう100年以上経っているのだから」。*De Secta Machometi*, pp. 32-33.

55 「3つ目の印、すなわち、真の預言者がそれによって自己の預言の確かさを示す、奇跡について話そう。そしてムハンマドが一度も奇跡を行ったことがなく、そしてそれゆえに、自分が真の預言者であるという確証を与えることが出来なかったことを証明しよう。そのことは、スィーラと呼ばれる書において、次のように書かれている。様々な集落から来たアラブ人たちは、ムハンマドが預言者であると名乗った時、奇跡を行うよう求めた。ムハンマドは彼らに答えた。「私はそのこと、すなわち、奇跡の力を伴って汝らのもとへ送られたわけではない。」また、コーランの第17章「夜の旅」では、アラブ人たちがムハンマドの同様のことを要求し、彼らの上に天を落とすように求めた。彼はそれをしようとは答えず、最後には、彼は一人の人間、一人の使いであると答えた。「このわしはただの人間、一個の使徒にすぎないものを」。また、アル・ブハーリーの書の「信仰」の項目には、ムハンマドがこう言ったと書かれている。「人々に彼を信じさせるための、奇跡を行う力を与えられていなかった預言者は存在したことが無い。しかし私に与えられたのは、神が私に吹き込んだ啓示である」。ムハンマドは極めて明確に、彼には奇跡を行う力が与えられていなかったと言っているのだ」。*De Secta Machometi*, pp. 36-41.

56 「上記の内容により、ムハンマドが決して奇跡を行わなかったことは明らかである。それにも関わらず、よくあることだが、もしも誰かが、ある種のサラセン人たちが偽って断言するように、月が2つに割れて1つがある山の上に、他方が他の山の上に落ちた、或いは一方がある袖より入って他方が別のものから入ったと語る場合には、私たちは論理的に、その主張はコーランによって証明されていないと答えることが出来る。アル・キンディもその奇跡を2つの理由から否定している。第一に、哲学者たちの言うところでは、月は大地より遥かに大きいのに、月の片割れが大地のごく小さな部分にしか過ぎない1つの山の上に、もう一方が他の山の上に落下したというのは、不可能だし信じがたい。遥かに不可能で信じがたいのは、一方がムハンマドの袖から入っていき、他方がもう一方の袖から入ったということである」。*De Secta Machometi*, pp. 41-43.

57 J. M. March, “En Ramon Martí i la seva “*Explanatio Simboli Apostolorum*””, *Anuaride l’Isntitut*

d'Estudis Catalans, 1908, p. 481; F. M. Pareja, *La religiosidad musulmana*, Madrid, BAC, 1975, pp. 187-189; E. Cerull, *Il "Libro della Scala"*, Studi e Testi, vol. 150, Città del Vaticano, 1949. を参照。

58 「ムハンマドの言行を、以下に見るように、純粋ではなく、むしろ不潔で罪深い彼の書籍群を用いて検証してみよう。アル・ブハーリーと呼ばれる書では、「沐浴 ablució」の章において、アナス・ベン・マリクが、ムハンマドが彼の妻たちを訪ね、日中または夜の一時間を彼女たちと過ごしたと説明している。彼女たちは11人であった。「そんなことが出来るのか」という質問に対しては、「我々は、ムハンマドには男性30人分の性的な能力もしくは強さが与えられていたと言っている」と答えている。また、コーランでは、第33章「部族同盟」において、ムハンマドが、神が彼に告げたことを語っている。「…汝に許したのは、まず汝が正式に金を払った妻、次にアッラーが戦利品として授け給うた女奴隷、父方の叔父の娘に父方の叔母の娘、それに、自分から預言者に身を捧げたいという信者の女があって、預言者の方でもこれなら嫁にしてもいいと思ったなら誰でもよろしい。但しこれは汝だけの特権であって、一般の信者には許されぬ」。また、彼の不潔さを示すには、コーランの第48章「勝利」にある、「アッラーは汝の古い罪も新しい罪もきれいさっぱり水に流して」という言葉が最もよいであろう。*De Secta Machometi*, pp. 34-37.

59 「以下、ムハンマドが、自分が神の預言者であると宣言した瞬間からどのようにふるまい始めたのかを示そう。そのことについては、ムスリムと呼ばれる本に見出される彼の妻アイーシャの話に由来する、彼が預言者であると名乗ったときの、彼の行動の開始に言及しなければならない。以下の通りである。「ムハンマドに孤独を愛さしめた…洞窟において天使が現れ、彼に告げた「読め…」」」*De Secta Machometi*, pp. 20-23.

60 「これらの点に関して、アル・ブハーリーと呼ばれる書にあるように、神が彼に与えた命令はこう言っている。「その者たちを殺すか、屈服させ、〔唯一の〕神以外に他の神格はなく、ムハンマドは神の使いで、彼に貢納や初穂を払うと誓わせよ」。ある者たちは、無知による単純さや悪魔の欺きによって、ムハンマドが良き人間で神の使いだと信じた。ある者たちは、その両親がこの誤りによって騙されていることを知っていて、彼らに続きたがったのであり、盲人が盲人を導くということわざを実行した。ある者たちは、名誉を得、財産を増やすことを望んだ。このようにして、サラセン人の民衆は増加していったのである。」*De Secta Machometi*, pp. 22-25.

61 G. C. Anawati, "Polémique, Apologie et Dialogue Islamo-Chrétiens. Positions classiques médiévales et positions contemporaines", *Euntes docete*, 22 (1969), pp. 392-395; J. Muñoz Sendido, *La Apologia del Cristianismo de al-Kindi*, cit., pp. 401, 419, 425 以降.

62 「疑いなく、彼の言葉の多くが間違いであった。第一に、コーランの *Muharram*、すなわち第66章「禁断」が述べるところでは、聖母マリアについて述べる際、イムラーン Imran の娘であるとしている。また、コーランの第19章「マルヤマ（聖母マリア）」でも「ハールーン（モーセの兄アロン）の姉」と述べている。このように、彼が、聖母マリアはアムラム Amram の娘でアロンの姉妹であると信じ、断言していたことが明らかである。これは預言者たちの書物によっても、福音書によっても歴史書によっても、明らかに誤りである」*De Secta Machometi*, pp. 26-33.

63 「また、自分自身について語る、コーランの第７章「胸壁」では、こう言っている。「神の使い、無視された預言者に従う者たちは、彼が律法や福音書で言及されているのを見ることが出来る。」また、コーランの第61章「戦列」では、キリストが彼についてこのように予言していると述べている。「わしの後に一人の使徒が現れるという嬉しい音信を伝えに来たもの。その（使徒）の名はアフマド」。ムハンマドは自身のことだと理解している。これは誤りである。なぜなら、キ

リストがそのようなことを言ったとは、書かれていないからである」*De Secta Machometi*, pp. 27-29.

64 「また、コーランの第４章「女」では、ユダヤ人たちについてこのように語っている。「彼らは「わしらは救世主（メシア）、神の使徒、マルヤム（マリア）の子イーサー（イエス）を殺したぞ」などという。どうして殺せるものか、どうして十字架に掛けられるものか。ただそのように見えただけのこと。」ここではイエスの受難と死を否定している。そしてこれは、預言者たちや福音書作者たちの書物によっても、使徒たちの言葉によっても、多くの古い記述によっても、キリストの受難を記念する十字架の印によっても、明らかに誤りである」*De Secta Machometi*, pp. 28-29.

65 「また、コーランの「女」の章では、こう言っている。「もしやお前たちは、神が彼らを過ちの中に置くのを望んでいるのか？」また、アル・ブハーリーと呼ばれる書物の「宿命」の章では、このように言っている。「神は人間に、その淫乱の部分を植え付け、（人間は）それに従う以外のことは出来ない。」このことやその他の言葉は、神が人間を、不可避的に罪を犯すように過ちの中に置いたことを示している。これは偽りで暴言である。創世記の第４章では、人に次のように告げられているからである。「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」さらに、この点についてはある賢いサラセン人が、大変見事なやり方で反論している。「もし神が私に罪を禁じ、その後で私を罪に追いやって、そのために私を罰するのならば、私は率先して言おう。それは神ではなく悪魔のやり口だと」*De Secta Machometi*, pp. 28-31.

66 「そのことはコーランの、第55章「お情ぶかい御神」においても述べられている。そこでは死後の天国の描写をする際、泉、果物、錦張りつめた臥状（ねだい）、これまで人間にも妖霊（ジン）にも体を触れられたことのないむすめたちに言及されている。このことと他の言説からも、ムハンマドが、永遠の幸福は食べることと飲むこと、性交と肉体的快楽から成ると信じ、預言していたことがわかる。これは明らかに間違っている。神がアブラハムに語り掛けるくだりの、創世記の第15章では、「わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」と書かれているのだから。イザヤ書にも書かれている。「あなたを待つ者に計らってくださる方は、神よ、あなたのほかにはありません。昔から、ほかに聞いた者も耳にした者も、目に見た者もありません。」」*De Secta Machometi*, pp. 30-31. ムハンマドを預言者とする意図に対する『ムハンマドの宗派について』の論争的性格のために、ラモン・マルティは、コーランや『アル・ブハーリー』、『ムスリム』やスィーラといった、イスラーム法に関する書物が彼に与える権威の助けを借りつつ、より正統的なイスラームの伝統に対応する、文学的・物質的な意味での、天国の感覚的な描写に話を限定している。そして、私たちが目にするように、同じラモン・マルティが、むしろ神学を説明する書物である『使徒信経要綱』において、キリスト教による天国についての精神的感覚を、同じく背信的な、アヴィセンナやアル・ガザーリーといったイスラーム哲学者たちが行った同じ天国の霊的解釈と共に確認している。このことは、コーランの完全に物質的な説明を、霊的感覚に基づいて解釈することにおいて、ラモン・マルティに、キリスト教が教える天国の霊的感覚の「合理性」について、補完的な議論を与えている。J. M. March, *En Ramon Martí*, cit., pp. 493-494.

67 「次に、預言者が持つべき４つ目の印を説明しよう。法と共に現れることである。すなわち、先述のように、神聖で良きものであるべき法である。ムハンマドの書物を用いて、彼が提示した法は、神聖でも良きものでもなく、むしろ不潔で、有害で、悪しきものであったことをここに述べよう。それゆえ我々は、その著者は神では有り得ず、その使いや預言者でも有り得ないと

結論せざるを得ない。以下に見るような、彼が定めた法を考慮すれば、明白である」*De Secta Machometi*, pp. 42-43.

68 ラモン・マルティは、『ムハンマドの宗派について』で簡潔に言及したキリスト教徒の諸原則について、同書を補完する作品であり、続けて読まれるべき『使徒信経要綱』の婚姻の条項において、詳しく説明している。J. M. March, *En Ramon Martí i la seva Explanatio Simboli Apostolorum*, cit., pp. 488-491.

69 「これらが彼らの法である。ムハンマドの彼の妻たちに関する法である。ムハンマドはコーランの「女」の章において、初めにこう言っている。「誰か気に入った女をめとるがよい、二人なり、三人なり、四人なり。だがもし（妻が多くては）公平にできないようならば一人だけにしておくか、さもなくばお前たちの右手が所有しているもの〔女奴隷〕だけで我慢しておけ」。購入し、扶養することが出来る女奴隷を妾として持って良いというのが、彼らの法である。この法によれば、全てのサラセン人は四人の妻と、妾を望む限り、そして養える限り、一人でも十人でも千人でもそれ以上でも、持つことが出来る。この法が偽りであることは明らかである。なぜなら何人も同時に複数の妻を持つことは出来ず、一人しか持てないからである。なぜなら、世界を秩序付ける神は、世界の始まりにあたって、アダムに一人の妻しか与えていない。もし神の意志が、男性は場合によっては複数の妻を持つことが出来るというものであったのなら、神はアダムに複数の妻を与えたであろうことは間違いない。なぜなら、彼が世界に一人きりであるのを目にしたとき、より大きな必要性があったのだから。つまり、複数の妻がいれば、より早く人類を増やすことが出来たのだから。また、姦淫や姦通を許しているという事実からも、この法の邪悪さは明らかである。先述のように、誰でも妻たちに加え、多くの妾を持てるのだから。このようなことは間違いなく、神の掟と人間の理性に反している」*De Secta Machometi*, pp. 42-45.

70 「離婚の法。コーランの「牝牛」の章では、こう書かれている。「女を離縁（してまた復縁できる）のは二回まで」「それでもし（男が）彼女（自分の妻）を正式に（すなわち三度目に）離縁してしまった上は、女が一度他の男と結婚するまでは復縁させることは許されぬ」。この法によれば、サラセン人はその妻や妻たちを、原因も理由もなしに、好きな時に捨てることが出来る。この法は不都合で不公正である。明白に神の掟、自然の法、理性に反している。なぜなら夫と妻が契約（婚姻）に基づいて平等に裁かれないからである。夫に許されることは妻にも許されねばならない。なぜなら、契約の法によれば、彼女は女奴隷でも臣下でもなく、むしろ対等なパートナーだからである。その上、その性のため、もろく出来ているのだから、打つ際や罰する際にも、彼女たちをより人間らしいやり方で扱わなければならない。サラセン人はこの法に同意せず、むしろ反対のことをしている」*De Secta Machometi*, pp. 44-45.

71 「妻たちとの性的関係についての法。ムハンマドは、コーランの「牝牛」の章で言っている。「女というものは汝らの耕作地。だから、どうでも好きなように自分の畑に手をつけるがよい」。このことについて、サラセン人の考証家たちの注釈はこう言っている。「どのような方法であっても」すなわち、前からであれ後ろからであれ。このような非難すべき忌まわしさと憎むべき無秩序は、神や理性に反していると、知性ある人は考える。第一に、野生の動物たちでさえ、誰も何も教えなくても同様のことを秩序あるやり方で行うというのに、至高の純粋な存在である神が、このような不潔さに対し、何も措置や教えを与えないでいると主張するのは、ほとんど冒涜である思われる。第二に、神は全てを秩序に基づいて作ったのであるから、その意思によってこのような無秩序が生じたはずがない。第三に、既に述べられたように、自然の法はこのこ

とに反対し、禁じているのだから、そのようなことは明らかに、このような無秩序にとどまっている、野生の動物たちの所業である。第四に、なぜなら、このように考えれば、このような責めるべき悪徳が与えられていることは、それによって逆らった子たちへの、或いは少なくとも罪を犯すような機会に身を任せた子たちへの、神の怒りを示すのであるから。第五に、このような措置によって、婚姻の最高の美点の一つであるところの子供の誕生が妨げられ得るのであり、それによってまず、そして主要なやり方で、この法と対照的なものが取って代わられたからである」*De Secta Machometi*, pp. 45-47.

72 「一時婚についての法。「ムスリム」の書が述べるところでは、ムハンマドは、一時的な婚姻、すなわち女性と関係を持って望むときに縁を切る行為を、彼の信徒たちに許可した。この法は彼が生きている間有効であり、その死まで撤回されなかった。明確に神の掟や国家の利益に反している、この法の不潔さは、人と呼ぶに相応しい人たちには、特に確認するまでもないであろう」*De Secta Machometi*, pp. 46-47.

73 「所定の部位以外への射精についての法。ムハンマドは彼の信徒たちに、所定の部位以外で性交し、射精することを許した。それについては、アル・ブハーリーやムスリムの書に多くの物語やムハンマドの言葉が記されている。この法は明らかに神の法に反しており、子供を得るためにもならず、これ以上の非難を必要としない」*De Secta Machometi*, pp. 46-47.

74 「食事の仕方についての法。「ムスリム」の書の「食物」の項でいうところでは、ムハンマドは彼の追随者たちに、指と皿を舐めるように言った。他の場所では、「汝らの誰かが食事をしたら、誰かがそれを舐めるまで手を洗うな」と言っている。ムハンマド自身、洗う前に自分の手を舐めていた。胸が悪くなる、獣のような馬鹿げたことである」*De Secta Machometi*, pp. 46-47.

75 「戦利品の法。アル・ブハーリーの書において、ムハンマドは信徒たちに言っている。「神は我々に戦利品を許した」。また「神は我々に戦利品を許した。我々の弱さと欠乏を見て、それを与えてくださったのだ」。これは神の掟にも自然の法にも反している」*De Secta Machometi*, pp. 46-47. 戦利品として獲得されたものと、勝者たちの間でのそれらの分配は、ガニーマ *ganima* ── 戦場において得られ、コーランで命じられた五分の一を除いて分配された動産の戦利品 ── とファイ *fay* ── 獲得されたそれ以外全てのもの、すなわち不動産 ── という言葉で呼ばれている。

76 「誓約違反の法。コーランの「食卓」の章に「誓約する際に少し軽はずみな言葉使いをしたくらいで神は別に汝らをお咎めになりはせぬ。だが正式に誓約しておきながら（それを破れば）咎め給う。そのような場合、罪の贖いとしては、汝らが普段家族に食わせている食物の中くらいのものを貧者10人に供すること、あるいは衣服を与えること、さもなければ奴隷を一人解放してやること。これだけの資力がない場合は、断食でもよい。これが正式に立てた誓約（を破った場合）の贖いである」とある。もしあるサラセン人が何かを誓い、それを破ろうとするときは、後で贖いをすれば、常に合法的にそう出来ると言われているのである。そしてムハンマドも、コプトのマリアとそのようにした。コーランの「禁断」の章によると、彼女とそれ以上の性的関係を持たないと誓った後、それを持ったので、自身の誓いに反したのである。そしてそのようにして、この法は彼の追随者たちに、明白に神の戒めに反する行為である、偽証を行う動機を与えた。それゆえ、アル・ブハーリーの書では、「コーランの解釈」の項において、アイーシャは、この誓いの贖いの法が出来るまでは、彼女の父親は決して偽りの誓いをしなかったと言っているのである。」*De Secta Machometi*, pp. 47-49. 引用された章では、ムハンマドのハレムにおける危機が暗示されている。そこでムハンマドは、一か月の間、彼が妾であるコプトのマリアを贔屓にしていることに嫉妬している、妻たちを訪れることを慎むと誓っている。ま

た、ある伝承においても、ムハンマドは一か月の間、彼女たちから離れていると誓ったが、その期間が終わる少し前に、それを為すのを目撃されている。『コーラン』66章「禁断」1-5。M. Gaudefroy-Demombynes, *Mahoma*, Madrid: Ed. Akal, 1990, pp. 202-204.

77 「欲するなかれ」という戒めに反する法である。アル・ブハーリーの書の「解放 manumissio」の項で、ムハンマドは言っている。「神は、行動で示されない限り、精神的な思考による罪を気にしない」。そのように考えるのならば、その意味はこういうことになる。「いかなるサラセン人も、思考の罪によっては罰せられない」。しかし、それは「欲するなかれ」という戒めに反している。*De Secta Machometi*, pp. 48-49.

78 「姦通罪の法。ムハンマドはコーランの「女」の章で言っている。「汝らの妻たちで、お互いの間で過ちを犯した者に対しては、汝らを除いて、４人の証人を連れてこい。そしてそのことについて証言がされたなら、彼女らを死ぬまで家に閉じこめるか、あるいは神が何らかの道を示すまで、すなわちそのような状況からの何らかの出口を与えるまで閉じ込めよ。そしてもし汝らの誰かが互いの間で不義を為しているのを見つけられたら、それを面と向かって告げ、叱責せよ。」このことについて、このような不義に関しては、４人の証人でもいない限り、証拠を提示できないだろうという注釈が付けられている。考えても見よ、このようにしてムハンマドは、言ってみれば、女性たちにこのような悪徳に対する道を開き、動機を与えたのである。なぜなら、それを立証するために必要な、その不義を完全に目にした４人の証人を見つけ出すのは極めて難しいからである。さらに、気を付けねばならないのは、この過ちを犯した男性たちはただ叱責されるだけであり、他の罰を受けない事である。神は罪の重要さに応じて罰の大きさを決めよと言っているのだから、この罪は重大とは見做されていなかったのだと理解される。ムハンマドがこのような大きな罪に対してこの法を定めたので、彼の追随者たちに動機と機会を与えたのだと認められる。なぜなら、恥ずかしげも恐怖もなく、多くがこの罪を犯したのである」*De Secta Machometi*, pp. 48-49. コーランは、婚姻や妾といった、合法的な関係のない人間同士の間での全ての性的関係を罰している。このような関係はズィナー *zina*、すなわち、姦通（婚外交渉）と呼ばれる。もし誰かを姦淫で訴え、本人が罪を認めないならば、詳細に至るまで完全に一致する４人の証人を提示しなければならない。このことは立証を極めて困難にしていた。

※『コーラン』を引用する際は、井筒俊彦の訳（『コーラン（上)』『コーラン（中)』『コーラン（下)』岩波書店、1957年）に依拠した。また、聖書の章句を引用する際は、日本聖書協会の「新共同訳」に依拠した。